

## 仏事を学ぶ 第十一回



### お経の意味 ⑧

今回は、他の人の幸せを願い、行なうことが仏の道であるとし、その具体的な実践行として布施、愛語、利行、同事の教えを説いている、修証義第四章「発願利生」について学びましょう。

#### 【修証義第四章発願利生原文】

菩提心を発すというは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと発願し営むなり、設い在家にもあれ、設い出家にもあれ、或いは天上にもあれ、或いは人間にもあれ、苦にありとも楽にありとも、早く自未得度先度佗の心を発すべし。其形陋しというも、此心を発せば、已に一切衆生の導師なり、設い七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ仏道極妙の法則なり。若し菩提心を発して後、六趣四生に輪転すと雖も其輪転の因縁皆菩提の行願となるなり、然あれば従来光陰は設い空く過すというとも、今生の未だ過ぎざる際に急ぎて発願すべし、設い仏に成るべき功德熟して円満すべしというとも、尚お廻らして衆生の成仏得道に回向するなり、或は無量劫行いて衆生を先に度して自からは終に仏に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。衆生を利益すというは四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ則ち薩埵の行願なり、其布施というは貪らざるなり、我物に非ざれども布施を障えざる道理あり、其物の軽きを嫌わず、其功の実なるべきなり、然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生佗生の善種となる、一銭一草の財をも布施すべし、此世佗世の善根を兆す、法も財なるべし、財も法なるべし、但彼が報謝を貪らず、自らが力を頒つなり、舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生産業固より布施に

なのです。

もし、悟りを求める心を起こして後、六道や、卵生・胎生・湿生・化生の四生などの生存の仕方を繰り返したとしても、その繰り返しのそれぞれの縁は、皆悟りの修行の願いを実践する場となるのです。そういうわけで今までの年月や、たとえ無駄に生きてきたとしても、この人生がまだ終わらないうちに急いで願いの心を起こすべきです。たとえ、悟りになるべき功德が熟して完成すべき縁であっても、なお一層、自らの功德を人々が悟りと出会い、道を得るように手向けるのです。あるいは永遠に行ない続けて人の喜びを先にして、自分はいに仏にならなくても、人をすくい、人に恵みを手向ける修行であり、『空』を実践している事は確かです。

人々を助けるには、四種の智慧の実践があります。一つは布施であり、二つには愛の言葉であり、三つには人助けであり、四つには心を行動を共にして導くという事です。これは菩薩の願いの実践なのです。広く施すというのは、むさぼらないという事です。物は天智の恵みであって、本来は私の物ではないからこそお金や物を人のために布施する事を妨害するべきではありません。それがささやかであっても、それを嫌うべきではなく、そのものの働きを真実ならしめるべきです。それゆえたった一言の教えでも人に差し上げるべきです。この世とあの世の幸せの種時ぎです。わずかな金銭や物でも、痛みの人のお役に立つべきです。この世とあの世の幸せを育てるのです。教えも宝です。宝も真実です。彼等からの報酬を当てにせず、自分のもてる力でそれを人のお役に立てるのです。渡しに船をおき、傷んだ橋を治すのも世間への布施の修行なのです。人々の暮らしを治め、産業に努めるのも、本来、人のお役に立つ布施に違いはないのです。

愛語とは人々を見る時、真っ先に優しさの心を働かせて顧みるような愛の言葉を差し上げるのです。慈しみの心で人を見る事は赤子を見

非ざること無し。愛語というは、衆生を見るに、先ず慈愛の心を発し、顧愛の言葉を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懐いを貯えて言語するは愛語なり、徳あるは讃むべし、徳なきは憐れむべし、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面いて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を樂しくす、面わずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず、愛語能く廻天の力あることを学すべきなり。利行というは貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり、窮龜を見病雀を見しとき、彼が報謝を求めず、唯単えに利行に催おさるるなり、愚人謂わくは利佗を先とせば自らが利省かれぬべしと、爾には非ざるなり、利行は一法なり、普く自佗を利するなり。同事というは不違なり、自にも不違なり、佗にも不違なり、譬えば人間の如來は人間に同ぜるが如し、自をして自に同ぜしめて後に自をして佗に同ぜしむる道理あるべし、自佗は時に隨つて無窮なり、海の水を辞せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり。大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし、卒爾にすること勿れ、濟度摂受に一切衆生皆化を被ぶらん功德を礼拝恭敬すべし。

#### 【現代語訳】

悟りを喜ぶ心を発こすという事は、自分がまだ救われる前に人々を救おうという願いを起こし手立てを尽くすのです。たとえ世俗生活にいても、たとえ僧侶であっても、あるいは天上界にいても、あるいは人間界にいても、苦しみの世界にいても、安樂な暮らしの中においても、自分を後にし、まず人を先に渡そうと思つ心を急いで起こすべきです。その姿形や境遇が見苦しい人であっても、人への痛みを心で発せせば、もう全ての人々の導き手なのです。たとえ七歳の少女であっても、そのまま男僧・尼僧・男の信者・女の信者という信仰共同体の導き手なのです。人々にとつて慈しみ深い父親なのです。男とか女とかの議論で本質を見失つてはなりません。これは仏の道の素晴らしい決まり

のような気持ちで言葉を使うのが愛語です。人としての善き徳のある人は讃えるべきです。徳の薄い人には哀れみの心で接したいものです。憎い敵を説き伏せ、権力者同士を和解させて争いを回避させるのも愛の言葉が根本なのです。面と向かつて真心や愛のある言葉を聞くと人は喜びが顔に表れ心を楽しくしてくださるのです。陰で真心ある言葉

を人づてに聞くと、肝に銘じ、魂に銘じて感動するものです。愛語こそ、帝王の意思や天帝（神）の意思をも変える力があることを知らなければなりません。

人助けという事は、身分の上下にかかわらず誰にでも困っている人を助ける手立てを働かせるのです。孔愉がいじめられている龜を助け、楊宝少年が弱った雀を助けた時、相手の謝礼など考えもせず、唯無心に人助けをせずにはいられない痛みに突き動かされるのです。愚かな人は言うかもしれませんが。人助けを先としたら自分が損をする。しかしそうではないのです。人助けというのは真実世界の働きです。平等に助ける者も助けられる者も救われていくのです。

形や行動を共にするということは、逆らわないということです。自分の立場にも逆らわず、相手の立場にも逆らわないことです。たとえば人間としての釈尊は、悟りにいながら人間の言葉で語り、悲しみを共にしたように相手の気持ち私の方へ融和させて、その後自分の慈悲と智慧を相手に同化させる配慮が道にかなったやりかたでしょう。自分の慈悲と相手の立場はその時に応じて自由です。海が様々な川の水を拒否しないのに相手に和して導く働きです。それゆえに色々な水を受け入れて大きな海となる事が出来るのです。

このように、清らかな世界を喜ぶ心の実践と願いは、必ず今述べたような道理があります。冷静に考えてください。軽率に扱うべきではありません。人々を救い、慈悲に包み込んで行く働きに、全ての人は必ずその恵みを頂いており、慈悲の功德を礼拝し敬いたいものです。